

スタジオ夜話

第76話 スタジオ夜話

「音を楽しむ媒体って何？」

☆ はじめに

いよいよ夏到来です。今年の梅雨は長かった？

記録的な7月の日照時間の少なさでした。夏好きの筆者はせめて8月は例年並みの夏でありますようにと思っています。読者皆様におかれましては夏風邪などにお気を付けてお過ごしください。

さて今回のスタジオ夜話、番外編も一段落ということで本来のスタジオ夜話となります。今回は「音を楽しむ媒体」についての夜話的な話しになります。お付き合いよろしくお願いたします。

☆ 「いまさらですがFM放送」です。

ネットワーク全盛時代、TVは地上デジタル放送、4K、8Kもある時代、しかしながら「いまさらですがFM放送」なのです。

以前番外編で筆者の作業場では調整卓出力以降は民生用アンプ、古いチューナー付きレシーバーも利用しているという、話しをしたことがあります。これが極めて好いのです。良いのではありません。好いのです。

プライベートな作業場なので可能なのですがチョットした時にそこでFM放送など聴きながら読書することもあります。癒されるのです。

ご存じのとおりFM放送はいまどきではあるもののアナログ放送です。なぜデジタル全盛の今日このFM放送が生き残っているのでしょうか？まさか筆者のために残しているとはさすがに思いませんが、ちょっと不思議な気がしないでもありません。

同じアナログ放送のAMはFM放送に比較して聴取可能エリアは非常に広いのですがローカル性を考慮した災害情報などにはテレビの地上デジタル化によって空いた周



我が家のダイニングでTVに接続して使っています。アンテナは作業場のFM専用アンテナから分配しています。かつてのコンポステレオ全盛時代昭和45年頃の普及機トリオのKT-3000です。

波数帯で補完FM放送を開始しました。

残念ながらその周波数帯の受信はワイドFM対応受信機でないと受信できません。しかしながら災害情報などに対応するためとはいえデジタル移行ではなくアナログFM移行なのです。国は何を考えているのでしょうか？

そこでスタジオ夜話的に考えて見ます。FM補完放送の内容はAMと同じ内容で放送されています。この補完放送の周波数帯を受信ができる逆輸入の古いFMチューナーなどはAMの音楽番組がそのままFMでリスニング可能なのです。

もしメーカーが採算が取れ広帯域チューナーを再び発売すればまたアナログFM放送が活性化するのは、今後FM放送を意識したコンテンツの充実がラジオ全体の活性化につながるかも？しれません。

話は元にもどります。「FMは音が良い」かつてのアナログ時代にはアナログ放送ですが、音を楽しむ媒体としては十分でした。「良い音」だったのです。

今日デジタルハイレゾ時代では「好い音」になりました。筆者の作業場では基本アナログでスピーカー再生です。聴覚上の問題がありますから、ダイナミックレンジは実質60dbぐらい？周波数特性は40Hz位から16KHz位？機器性能はもっとあり

ます。(FM放送のダイナミックレンジはおよそ60dbと言われています。)かつてのハイファイで十分楽しめます。CDクオリティには今一步、ハイレゾでなくてはという方々には、不満足かもしれませんが筆者にはコンテンツ内容120%満足できます。

「良い音」と「好い音」は違います。プロフェッショナルの読者皆様はいかがお考えでしょうか？論議はまたの機会にということですが、「いまさらですがFM放送」古いチューナーを探して楽しんでみてください。筆者も作業場以外ダイニングのTVに古い安チューナーを最近設置しました。

☆次回は

「いまさらですがFM放送」の続き、プロフェッショナルの方々へのレポートと「いまさらですがレコードを楽しむ」を予定しています。暑い夏健康を大切に乗り切りましょう。

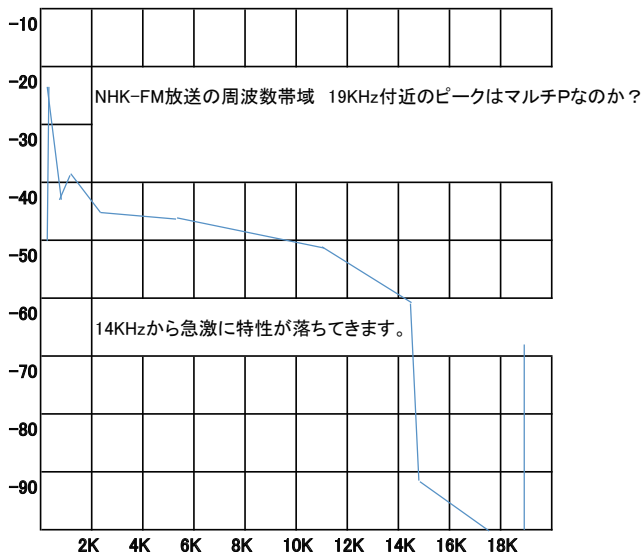
スタジオ夜話これからもよろしくお願いたします。

参考までにとFM放送の可聴周波数スペクトラムとダイナミックレンジを載せています。

— 森田 雅行 —

FM放送の可聴周波数帯域

NHK-FM



FM放送ダイナミックレンジ

媒体や伝送路がもつダイナミックレンジの値です。

カセットテープのダイナミックレンジは、磁性体の違いやノイズリダクションの方式によって違いはありますがおよそ 50 ~ 60dB といわれています。

高級テープやハイポジションテープでは 60dB 以上でメタルテープでは最大 62dB も？

実質的に聴取可能な最小音量が問題なのですが、送信所からの距離、受信機の性能、受信状態に、大きく影響を受けます。送出に用いられる送信機は過変調を防ぐためにリミッターがあり、ダイナミックレンジの最大値を制限しています。かつてレコードが持つダイナミックレンジは、およそ 65dB ぐらいだったのですが（これはレコード盤の溝の振幅比、最小振幅はレコード針が検知できる限界、最大振幅は隣の溝にはみ出さない範囲が上限でした。

録音テープが持つダイナミックレンジは、磁性体、トラック幅によって違いますがおよそ 65dB 以上といわれていました。

日本国内の、FM 放送が持つダイナミックレンジは、およそ 60dB といわれています。したがって当時 FM 放送は十分にコンテンツの特性をカバーしていたといえます。

スタジオ夜話 (番外編) 「サウンドドラマ制作」

長い間ありがとうございました。

スタジオ夜話番外編「サウンドドラマ制作」長い間お付き合い頂きましてありがとうございました。2014年1月号からスタートして全61回の連載になりました。

サウンドドラマ制作を様々な角度から捉え具体的制作技術などの解説もしました。いずれにしてもサウンドドラマ制作に限らず「ものを創る」には、たずさわる人、また人々とのより良い関係性、コミュニケーションの重要性、そしてなに

よりも「創意工夫」が大切であることをお話してきました。

ものを表現することの面白さは読者皆様は十分に理解、経験してきたものであることは承知しています。

筆者がこの連載で言いたかったこと、それはその面白さを聴取者の方々にも作品を通して共有してもらうこと、作品自体のオリジナルの面白さももちろんですが、作品の持つ様々な要素を音にすること、聞くことの面白さです。

創意工夫はその手段です。サウンドドラマ制作に限らず「全ての制作」にたずさわる皆様の益々のご活躍を期待するとともに長い間お付き合いいただきました皆様に感謝いたします。また「音」にかかわる番外編も時々掲載いたしますのでスタジオ夜話これからもご支援よろしく願いいたします。 感謝！